

特集

大学出版国際化 に向けて

座標軸をどこに定めるか

ロシアにおける電子出版の幕開け

—「第7回モスクワ・ノン/フィクション国際ブックフェア」報告 * 植村 八潮 —2

第7回ヴィリニウス・ブックフェア&バルチック・ブックフェア報告 * 依田 浩司 —7

慶州、京都、そして杭州へ

—新しいステップへと移行する「日・韓・中大学出版部協会合同セミナー」 * 後藤 健介 —12

文化の活性化へ向けて

—欧米の大学出版会の活動状況について * 八幡 努 —16

● 連載

ペーパークラフトの四季——冬 紙で作る干支 * 畑野 光男 ——表2

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 40 北海道大学総合博物館 ——20

大学出版部ニュース ——22

関西支部だより ——表3



「紙で作る干支」

冬

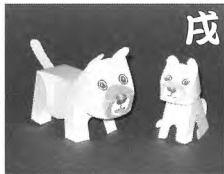
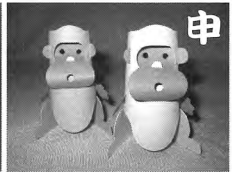
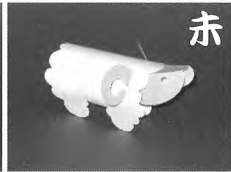
平成10年「寅年」……年賀状として干支のペーパークラフトをある企業から依頼された事が始まりでした。

干支というのと、子供のころから慣れ親しんだ十二支(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)を年賀状の挿絵として毎年描いて来ましたが、ペーパークラフトで干支の動物達を制作するのは初めての挑戦です。

今までの作品の中には、ねずみ・牛・馬・ゴリラ・鳥・犬など動くペーパークラフトシリーズがありますが、それとは全く異なる手法で制作することになりました。

まず、単純な形状で組み立てが簡単、そして誰もが道具なしで手軽に組み立てられること、封書(定形郵便物)サイズに収め、年賀状として郵送出来ることなどです。そして完成した作品は、お正月にふさわしいほのぼのとした親しみのあるクラフトであることが、必要な条件になります。これらが、制作意欲を掻き立てられ、苦心と楽しさが混在する、年に一度の楽しみとなっています。

制作過程では、まず整理されたシンプルな線で表現するデフォルメを、どこまで追求するかが悩む所です。その意味では、卯年の作品が限界だと思えます。これは組み立てが容易であるだけでなく、型抜き作業などの物理的条件の為でもありません。又、それを補う表面処理も出来るだけシンプルな円と直線で仕上げるように心掛けています。



2007 亥

2008 子

2009 丑

ここから新たな十二支の制作が始まります

畑野光男
(グラフィックデザイナー)

私の作品では、動くことも大切にしていきます。例えば、しっぽを引くと頭を振る、口で吹くとスイングする、頭を押すと羽ばたくなど、いろいろです。

辰年、巳年では、クライアントの意向もあって立体とは違った、ポップアップクラフトで制作することになり、ちよつと不満がありました。カードを開くと竜が飛び出し、蛇は口を開き舌を出すなどの作品としました。次回には、いつもの方法で制作したいと思っています。

午年から木馬、羊、猿、鳥そして今年の戌年まで制作して来ましたが、これからも猪、鼠、牛と続きます。このシリーズでは、いろいろと勉強させてもらい、新しい発見も多々ありました。

まだまだ追求すべきペーパークラフトの種類は沢山あります。ハイテク時代の中、素材な紙を使った作品で、また別の角度から皆さんに楽しんでもらえる癒しのペーパークラフトにも挑戦して行きたいと思っています。

特
集

大学出版国際化に向けて

——座標軸をどこに定めるか

ロシアにおける電子出版の幕開け

「第七回モスクワ・ノン／フィクション国際ブックフェア」報告

植村 八潮

(東京電機大学出版局)

二〇〇五年十一月三日から十二月四日まで、五日間に渡り開催された「第七回モスクワ・ノン／フィクション国際ブックフェア」に派遣専門家として参加した。国際交流基金(JF)と出版文化国際交流会(PACE)が共同出展するナショナルブースの設営、会期中の各種問い合わせに対する応対、出版事情の調査などを役目としている。大学出版部協会への派遣要請に応えての派遣は、前年の東海大学出版会(当時)の中村晃司氏に続いてとなる。

会として七回の開催を数える今年は、テーマ国のポーランドをはじめ、最大展示となったフランス、ドイツ、ベルギー、さらにフィンランド、ノルウェーなどの北欧や東欧、旧ソビエト連邦のCIS諸国など、十三カ国、二二四の出版社・団体・書店らが参加した。今年の入場者数は三万人で、年々、その数も伸びておりモスクワ市民にもすっかり定着している。

この背景にはモスクワ市民の本好きがある。図書館は劇

場街に隣接した市内の目抜き通りにあり、ドストエフスキの銅像が図書館の前庭におかれている。市民にとってゴリキーやドストエフスキなどに代表される重厚なロシア文学は誇りであり、その伝統は今でも市民の間に受け継がれている。

また、現代日本作家の人氣も、噂に聞いていた以上のものであった。きっかけが村上春樹であることは、よく知られている。ソビエト連邦崩壊当時、若者の不安とアイデンティティ喪失感がムラカミ



いつも混雑が絶えない日本ブース



藤原伊織の新刊案内を掲げたアズブカ社

ブカ社のブースが藤原伊織の新刊を大きなポスターで宣伝していた。そのキャッチフレーズには「ムラカミハルキのように賢く、キタノタケシのように残酷だ」とあった。これ一つとってもロシアにおける日本ブームがうかがえる。ブックフェアの特徴やロシア内における位置付け、特に巨大なモスクワブックフェアとの棲み分けなどについては、『大学出版』六四号、六五号に掲載された中村レポートに詳しい。またロシアの大学出版部についても貴重な報告書となっているので、ぜひ再読いただきたい。そこで本報告では、普段うかがい知れないロシアの電子出版事情を中心に取り上げることにする。

ワールドを支持したという。期間中、新アルパート通りにあるモスクワ最大の書店、ドーム・クニエギを駆け足で訪問したが、ダブル村上のもう一人村上龍吉本はなな、さらに『O.U.T』の桐野夏生ら推理作家の本も村上春樹の本同様に、かなりの部数が積まれていた。フェア会場でもアズ

ロシアの電子出版

世界の電子出版は、パソコンやインターネットの普及とイミングで進んでいる。ハードウェア技術の日本、パソコンの基本ソフトウェアやネットサービスでリードする米国、さらに基礎技術やコンテンツのある欧州が、競争と協関係の中で市場を開拓してきたのである。その結果、日本においても欧米のデジタルコンテンツや電子出版状況については多少なりとも把握することができた。一方、ロシアにおける電子出版については、ほとんど情報がなかったと言ってよい。

ブックフェアを機会に、電子出版物の展示ブースを取材することにした。会場で電子出版物を探すと一番目だったのが、CD-ROMやDVDによるパッケージ系電子出版である。ロシアのインターネット事情やパソコンの普及を考えると、いまのところ容量の多い画像系電子出版物は、オンラインではなくパッケージ販売が中心とならざるを得ないだろう。複数の専門出版社が出展していた。

マルチメディア電子出版

ダイレクトメディア社は、主にCD-ROMによるマルチメディア電子出版物を展示販売していた。その内容は、文学、芸術、宗教、哲学、美術、高等教育用教科書である。親会社はドイツの会社でロシアには〇二年に進出したという。

ロシアにおける正統な電子出版事業社として現在までパッケージメディアによる電子出版事業に取り組んできた。特に学術・教育の専門分野は市場としては、これからだが期待される分野なので積極的に取り組んでいるという。

制作にはダイレクトメディア社の専門編集者があたり、研究所や博物館、大学などが監修している。デモを見る限りでは静止画に文字情報を付けた作品であったが、音声や動画の入ったマルチメディア作品もあるという。浮世絵などの日本美術の解説CD-ROMがデモ展示されていたが、写真の品質が低く印刷物からのスキャニングデータかもしれない。美術書を画像情報と文字情報に分けて保存しただけの編集ともいえる。

価格は、平均二〇〇〜三〇〇ルーブル（千円前後）である。販売は大手書店やウェブサイトからの注文も受け付けている。デジタルコンテンツ出版もウェブサイトから有料ダウンロードできるようにしているという。

オーディオブック

ダイレクトメディア社と同様にブースいっぱいにはCD-ROMを並べていたのが、シーディーコム社である。もともとカラオケソフトの会社として九五年に設立された。なお、夜の長いロシアでは「カラオケ」はロシア語になっているほど人気である。

ここで扱われていたCD-ROMは、MP3のオーディオ

ブックである。特に小説の朗読をMP3形式で収めたオーディオブックは、〇四年から市場が拡大している。カセットテープで販売していた朗読をオーディオブックに代えて、人氣が復活したという。

意外なことだったが、オーディオブックの売れ筋は小説だけではなくビジネス書などの実務書もあるという。マーケティングの神様コトラーの本や、ロシアや外国のリーダーの本などが人気である。

日本ではニッチ市場にすぎない朗読テープであるが、米国では定番分野である。アマゾン・コムで売れ筋の本を検索すると、カセットテープやCDが別売されていることがわかる。車社会の米国では、通勤途中にハリーポッターなどの小説だけでなくビジネス書もカーステレオで聞いているのである。一方、

ロシアにおけるオーディオブックの普及は米國と事情が異なり「レコード文学」という伝統があったことが大きい。テレビ番組も少なく一般家庭の娯楽が少



シーディーコム社のスタッフは日本ブースにも商談に来た

なかったロシアでは、夜、家族が集まって朗読レコードを聴く習慣があったという。

ブックフェアでは、各ブースや喫茶コーナーで作家や詩人の朗読会が積極的に行われていた。ロシアには吟遊詩人の伝統もあり、文学を聞いて楽しむことはロシア人にとってポピュラーなのだろう。

デジタルコンテンツのダウンロード販売については、検討中とのことであった。これは他の電子出版社でも同様である。ダウンロード販売市場の立ち上がらない理由として、個人でパソコンを持つ人が少なく、持っただけでもダイヤルアップによるネット接続環境であることが指摘されていた。また、海賊版天国のロシアという社会的状況をあげた社もあった。

ケータイ配信

本格的なデジタルコンテンツのダウンロード販売を行っているのが、文字通りモバイルブックというブランドを掲げて電子出版を展開しているモバイルブック社である。残念ながら聞きそなかったのだが、会期中、同社によるセミナーが行われていた。会場で配布されていたチラシには「eブックは、いつでもどこでも購入して読むことができる」と、どこかで聞いたような惹句が並んでいた。

ウェブサイトによると、ケータイだけではなくパソコンで購入することもできる。その場合、書店でまずモバイル

ブックカードを購入し、そのコードを入力するしくみとなっている。ブックフェアのセミナーにあわせて、無料コンテンツのサービスが行われていたのだが、うまくダウンロードできなかつた。

クレジットカードの発達していないロシアで、誰でも使いやしく、しかも双方にとって安全に少額課金取引ができる方法としてプリペイドカードを使っているようである。これは同じような状況下であった、九〇年代の日本でも注目された手法である。

ダウンロードできる本の種類は限られているが、その分野は現在進行形で拡大しているとのことである。サイトには常に新しくダウンロードできるようになった本の情報が更新されている。

オンライン書店

オンライン書店オゾンのブースは、大きなロゴマークを壁紙代わりにした以外、わずかな本を並べるだけの簡素な作りである。日本大使館の中村参事官やJFのスタッフに聞くまでは、これがロシア最大のオンライン書店として勝ち組になっているとは思わなかつた。シンプルを通り越して殺風景な展示ディスプレイでブースに立ち寄る人もまばらであった。

オゾンのスタッフに聞くと、ロシアにおけるオンライン書店は、大きいところで三社あり、そのなかでもオゾンが



リーダーで会社は八年前に設立したという。扱った商品の九割が本で、それもロシア語である。

アマゾン・コムはロシアに参入しておらず、ロシア在住の外国人以外、ほとんど知られていない。購入価格は平均的には書店に比べて5%ほど高いが、ベストセラーだと書

店より安く販売されている。ただし、ロシア国土は広く郵便料金は高くついている。

モスクワ市内で在庫があれば、注文日の翌日出荷し三日目に届くという。ただ、あまり在庫は抱えていないようである。在庫がなければ版元に注文することになるが、在庫情報が確かではないため品切れの場合もある。その場合は前金を返却するという。

海賊版天国ロシアにおける電子出版

以上のようにロシアの電子出版ビジネスは、まだCD-ROMやDVDのパッケージ系電子出版である。パソコンの普及が遅れていて、ネット環境が日本に比べ遅れているせいもある。インターネットカフェはここも深夜まで盛況

だった。

残念ながらというべきか、ご多分に漏れずというべきかロシアでは、ソフトやデジタルコンテンツの海賊版が横行している。ベルヌ条約にはもちろん批准しているとはいえず、WTO未加盟のロシアでは、ソフトウェアの海賊版の天国である。

聞くとところによるとウィンドウズXPにMSオフィスをいったCD-ROMが一〇〇ルーブル(四一〇円)で売られているという。パソコンはOSやアプリケーションソフトがバンドルされていない状態で販売されている。通常はバンドルすることで安くなるのだが、違法コピーソフトを購入してインストールして使用すれば、それより安くパソコン環境が整うからである。

このような環境にうまく適合しながら、ロシアにおける電子出版ビジネスは確実に進展している。数学や情報科学において優秀な人材を輩出してきたロシアである。またロシアの若者たちは、ITビジネスのおもしろさに気づいている。いずれ世界の電子出版をリードする時代がくることだろう。

【注】

- ダイレクトメディア社 <http://www.directmedia.ru>
- シーディーコム社 <http://www.cdcom.ru/>
- モバイルブック社 <http://www.mobilebook.ru/>
- オゾン <http://www.ozon.ru>

第七回ヴィリニウス・ブックフェア&バルチック・ブックフェア報告

依田浩司

(東京大学出版会販売部)

出版文化国際交流会の要請で、二月二十三日(木)〜二十六日(日)の四日間にリトアニアで開催された第七回ヴィリニウス・ブックフェア&バルチック・ブックフェアに派遣専門家として参加してきました。リトアニアはバルト三国の一つで、面積は六万五三〇〇平方キロメートル(北海道の約八割の広さ)、人口は約三四三万人(横浜市の人口とほぼ同じ位)。首都はヴィリニウス(Vilnius)。第二次世界大戦中にヨーロッパからアメリカに逃れるユダヤ人に、日本通過のビザを発給した杉原千畝が日本領事館領事代理として赴任していた国でもあります。

ヴィリニウス・ブックフェアとバルチック・ブックフェア
ヴィリニウス・ブックフェアは今年で七回目の開催となります。会場はヴィリニウス郊外にあるLITEXPO (Lithuanian Exhibition Centre)です。ヴィリニウス市内から車で十分くらいのところであり、各ホールの大きさは東京

国際ブックフェアが開催されている東京ビッグサイトの半分くらいの大きさでした。主催者はLITEXPOとLithuanian Association of Publishers and public organisationです。出展社数は三十五社で、四日間で



日本ブース全景



折り紙の本は大人気

五五二〇〇人の来場者でした。

会場では国内の出版社や書店が販売ブースを出展しています。そこでは、一〇%ほどの割引販売をしており、書籍を安く購入できることを目当てに来場する人も多く見られました。

ました。また、中学生や高校生が社会科見学の一環で来場する姿も見られました。

バルチック・ブックフェアはバルト三国が持ち回りで開催しているブックフェアで、今年のリトアニアの担当です。バルチック・ブックフェア開催年は海外からの参加国が増えるそうで、昨年七カ国だった参加国は、今年のリトアニア・ラトヴィア・ドイツ・ポーランド・ベラルーシ・日本・ロシア・スロヴァキア・オーストリア・スウェーデン・イ

スラエルの一カ国でした。各日にテーマが設定されており（括弧内がその日のテーマです）、開場時間は一日目（DAY OF LIBRARIES）と二日目（EXTRAORDINARY MEETING）が十時から十九時、三日目（LONG FRIDAY）が十時から二十一時、四日目（FAMILY DAY）が十時から十七時でした。特に忙しいと感じたのは、二日目と三日目で、三日目が忙しいのは日本の東京国際ブックフェアと似ています。

前日設営

二月二十二日午前十時に日本大使館を訪ね、大床泰司臨時代理大使と担当の瀬戸はるかさんに挨拶をしました。大使からは「今回の事業は、文化交流の一環で大変期待している。寄贈先の希望があったら教えてほしい」と言われたので、「学術書は大学図書館へ、児童書やコミックは子どもが集まる図書館へ寄贈していただきたい」とお願いしました。

大使に挨拶後、ブックフェアのアテンダントをお願いしているヴィオレタ・デヴェナイテさん、アグネ・ステポナヴィチューテさんを紹介されました。ヴィオレタ・デヴェナイテさんはヴィリニウス大学で数学の修士号を取得して、早稲田大学に学部と修士課程（日本語学）の二回の留学経験があります。現在、ヴィリニウス大学で日本語を教えています。アグネ・ステポナヴィチューテさんは宮崎大学へ

一年間留学経験があり、昨年の愛知万博のリトアニア館でアテンダントを務めた経験があります。

打ち合わせ後、ブックフェア会場のLIFEEXPOへ移動して設営に取りかかりました。日本からのダンボール一四箱約五五〇冊の書籍と、日本大使館が現地で購入した日本に関する書籍三〇冊を日本ブースに展示しました。日本ブースはアルファベットの「J」の字を逆さにしたような構成で、「日本語」「学術書」「日本文学」「日本文化」「現地で購入可能な書籍」「折り紙」「児童書」「コミック」の八つのコーナーを作成しました。

会期中の仕事

二十二日の十時より展示ホール二階のイベントホールで開会式がおこなわれました。まずブラザオスカス大統領が「リトアニアでは読書人口が減少していると言われていますが、読書量がその国の発展に寄与していると思う。図書館の予算減少問題を解決したい」という挨拶をおこないました。続いてプルデイニコヴァス文部大臣が「今年は一ノカ国より参加があり、遠く日本からも参加してくれて感謝している」と日本からの参加を評価してくれました。文部大臣の挨拶の後、大統領と文部大臣が子どもを交えてテーブルをおこない、開会式は和やかに終了しました。

日本ブースには開会式終了後からたくさんの方が訪れてくれました。日本に観光で来たことがある初老の男性や、

国際交流基金の図書寄贈プログラムによって書籍が寄贈されたゲデュミノ工科大学附属図書館の副館長がブースを訪れて、楽しそうに展示書籍を閲覧していきました。

一日目の終了後、ヴィリニウス旧市街のゲディミナス城横にある工芸博物館で開会記念パーティーがおこなわれ、大使と出席しました。博物館のなかで立食パーティーをおこなうという発想には驚きましたが、展示品を見ながら談笑できるというのはなかなか凝った趣向だと感じました。

会期中の主な仕事は展示した書籍の閲覧や、また書籍の翻訳希望者への出版社やエージェンツの紹介、購入希望者へのインターネットを利用した購入方法の紹介、あとは折り紙の実演をおこないました。来場者の



折り鶴を教えるアテンダント



熱心に本を読む来場者

一番の希望は「展示書籍を「買いたい」というものではない。展示書籍は会期終了後に大使館へ一旦納められて、そこから各地の図書館や学校に寄贈されることになっており、来場者に販売することはできません。「販売

者」に販売することはできません。「販売

いました。

折り紙の折り方の本は老若男女に人気がありました。折り紙は鶴が一番の人気で、折り紙の実演をやっていると、見物の人ばかりができました。若年層はマンガやアニメの本に、中高年層は日本文化や庭園、木造建築の本に興味を持っていました。現地で「ポケットモンスター」や「ドラゴンボール」のTVアニメや、宮崎駿のアニメ映画が放映されているからでしょうか。庭園は龍安寺の石庭や、バルコニーの木造建築の写真集に人気がありました。

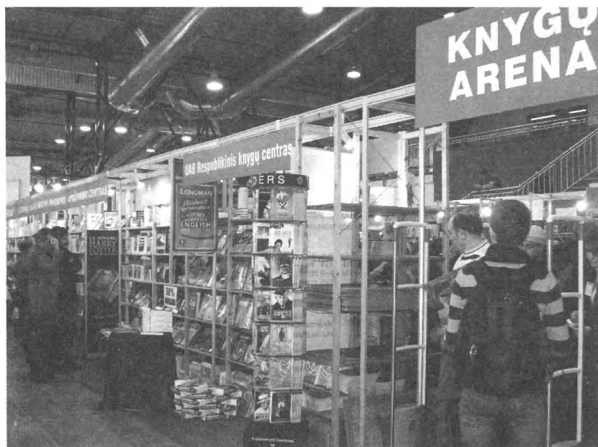
現地の出版社や書店のブースでは作家がサイン会やトークショー等をおこなっており、サインをもらうのを楽しみにしている来場者が多く見られました。

リトアニアの出版事情

日本文学で有名なものはある程度、リトアニア語に翻訳されています。三島由紀夫や村上春樹、鈴木光司の翻訳作品がブックフェア会場の書店ブースや市内の書店で販売されていました。

学術出版では、ヴィリニウス大学出版部やヴィリニウス教育大学出版部といった大学出版部も活動しており、教科書や学術書の刊行をおこなっています。教科書の装丁は地味なものが多く、学術書の初版部数はかなり少ない模様です。書店の規模は、日本の駅前にあるような個人経営の書店の規模でした。ヴィリニウス大学内の書店もそれほど大

できません、見るだけです」と答えたときの残念そうな顔は今でも印象に残っています。東京大学出版会の本で人気があったのは『日本美術の歴史』『江戸の動物画』『A History of Showa Japan』などです。「バブル経済についての研究書を見たい」「セラミック工学についての書籍はないのか」などと、専門的な質問も受けました。宮崎駿のアニメ映画のフィルムブックを熱心に読んでいく男性や、楽しそうに鶴を折っていく親子連れなどでブースは終日賑わ



現地出版社&書店のブース

大きくありませんが、在庫量は多かったです。棚卸中で棚をじっくり見ることはできませんでしたが、三島由紀夫や村上春樹の翻訳本が並んでいました。

終わりに

前日設営から数えるとまる五日間、朝から晩まで働き通しで大変でしたが、日本から遠く離れた北欧で、熱心に日本の書籍を食い入るように見る人たちを見て、本に携わる仕事に就いて良かった、リトアニアまで来て良かったと、つくづく感じました。東京国際ブックフェアの「大学出版部協会」のブースの設営や管理の仕事をおこなった経験が非常に生きたと思います。一出

版社としての営業ではなく、「日本」や「日本の出版社」の営業を担うことができたといい経験でした。今回参加した経験をこれらの営業活動や大学出版部の活動に生かしていきたいと考えています。アテンダントの二人も、来場者からのひっきりなしの問い合わせの対応で大変だったようですが、流暢な日本語と機転でずいぶん助けられました。リトアニア大使館の方々や、国際交流基金、出版文化国際交流会のみなさんにこの場を借りてお礼を申し上げます。



児童書を手にする来場者

慶州、京都、そして杭州へ

—— 新しいステップへと移行する「日・韓・中出版部協会合同セミナー」

後藤 健介

(国際部会副部長・東京大学出版会)

「韓国・慶州は、かつて新羅の都として栄え、日本でいえば奈良や京都のような歴史ある古都として……」云々とは、世のガイドブックで繰り返される常套句だが、その慶州の観光名所を、昨年(二〇〇五年)十月、観光客にしては妙に緊張した面持ちで、観光というか、移動している一群の日本人がいた。いうまでもなくこの一群とは、三カ国セミナーに参加するために訪韓した「日本」出版部協会の代表十四人である。メンバーの胸中には、その日の午後から始まる予定の日・韓・中の出版部協会の三カ国セミナーが、どんな展開をみせるか、さっぱり予見できないという影がさしていたのだが、古代の遺跡の上、秋の空は高く、野の花は咲き、なにかいいことがありそうな気がする道中だった。

慶州セミナーでの課題

しかし実際のところ、「いいことありそう」などと言っ

てはられない状況であった。

それまで七回を積み上げてきた三カ国セミナーが、二〇〇三年のSARS問題のために、中国側協会と継続した連絡がとれなくなっていた。事態の打開を目指して二〇〇四年に日韓の代表が北京に赴いて開催した「調整会議」では、中国側の対抗提案(毎年開催の断念と「団長会議」形式への変更)に日韓とも慌てた。さて、では二〇〇五年は日本と韓国でしつぱりやろうと話がまとまったその数カ月後に、一転中国側協会が参加を表明、中国側への配慮から慶州セミナーは「第九回」三カ国セミナーと称され(この文章でも第八回が抜けているのを見てとっていただけのだろう)発表主題も変更し開催されることになった。それでも正常に復したとはいえなかった。ここ慶州で締結し三カ国関係を磐石にしようとして、韓国側協会が調整に尽力した「三カ国協力調印書」の文案中、「セミナーの毎年開催」を定めた原案に対して、中国が「隔年開催」を主張、セミナー当日

になっても同意がされていなかったのである。

セミナーの日程を通じて、結果から言うと、調印書は締結されなかったし、中国は二〇〇六年に日本が開催するセミナーに、「理解」を示しながらも参加を確約はしなかった。

これらの経緯において、中国側に不誠実があったとは、私は思わない。国土が広大で地方格差も大きく、加盟校数も多い中国側協会は、協会内で国際交流に対するコンセンサスを醸成すること自体が難しいであろうことは容易に想像がつく。我々との非公式な席で、中国側協会の代表の一人はSARS問題に対する日本側の対応に率直に遺憾を述べながらも、それがむしろ中国側協会内での意見調整に執行部がかかえている問題の一つだという文脈であったことを私は知った。

我々（この場合「我々」に韓国側協会を含めていいだろうが）は東アジアにおける大学出版部の国際交流とその主要な場であるこのセミナーがどれだけ意義のあることをかを説得し、今後の展望を示すことで中国の継続的参加を説得する必要に迫られた。この点、中国側協会は意図的ではないながらも、大学出版部が国際交流をする意味と、その内容がいかなるものであるべきかについて、この機会に問いを投げかけていたと考えるべきなのである。その意味で言えば、かねてから「実利性の不足」をこのセミナーに問題提起していた韓国側協会も、その「調印書」提案でもって、

中国に対するのと同時に日本にも、強いメッセージを発していたのだ（「調印書」案にはセミナーの毎年開催のほかに「資料交換」「ブックフェアの開催」「人員交流」などの条項がもりこまれている）。

日本側協会は、来たる日本開催の第十回セミナーを単なる儀式ではなく、これらの問いになにかの回答への道筋を示すものとして企画し、そのことをもって関係の修復を図らなくてはいけないという宿題を出されて慶州から帰ってきたのだ。

「セミナー正常化」から、その次のステップへ

目下、まだ三方国協力調印書が「セミナーの毎年開催」で締結されるかは、（中国側から検討の意向は示されたが）確定はしていない。もちろんセミナーの形態は柔軟に検討されてよいが、実務者による毎年の交流は、今後実を挙げべき国際交流のためには維持すべき基準、つまり正常状態であろうと我々は考えている。さらには、セミナーが「正常化」した後、ではこのセミナーを今後どのような実効的な効果をあげるものとして位置づけるかという問題——セミナー開始以来、各国がいろんなアプローチから展開を試みてきた最大の課題——に戻ってゆくことになる。「セミナー正常化以後」を真に新しいステップへの跳躍としうるかどうか、今後の正念場になるだろう。

私見ではあるが、三方国セミナーで明らかにされ、議論

される韓・中の経験は、日本の大学出版部と協会にとって、学ぶべきものが極めて多い。例えば、韓国のある大学出版部はアメリカに事務所をおき、刊行する英文図書などをインターネット書店で世界的に流通させる試みを始めている（いろんな関係で英文図書を作った方がいいが、流通に苦心している日本の大学出版部は多いはずだ）。中国の大学出版部は、日韓と大学や出版業界の構造に大きな違いはありながらも、海外事務所の設立・米国出版社との提携（教科書の独占的翻訳出版）、また協会会同で地方の大学対象に教科書採用の見本市を開催するなど、大学出版部（協会）がとりうる最も積極的な戦略の数々を既に実行している。

そうした大学出版部の多彩な事業モデルを目の当たりにする面白さのほかに、将来的な英文図書の共同市場の確立、版權売却（まだ韓国・中国において、日本語の学術書・教科書の相対的な価値の高さはある）の活発化、そして「国際交流を試みている」という事実が所属大学に対してもっている価値など、セミナーが導く国際交流が我々にもたらず総合的なメリットは大きく、さらに大きくなりうるのではないかというのが私の思いである。

慶州、京都、そして杭州へ

さて、上述のような酷な慶州セミナーが、一方で奇妙にさわやかな印象をもったのは、韓国側の情の尽くされた歓待と、中国側の率直なコミュニケーション努力にくわえて、

「それが秋の慶州だったから」だといったら、「なにをそんな非本質的なことを言うか」とお叱りをうけるだろうか。

国家の外交を引き合いに出すのは気が引けるが、それでも、その外交交渉の場の多くは、一見宴会であったり、旅行であったりするようなフリをしていることが多い。それは、交渉の当事者への心理的配慮（または作戦）であるのと同時に、国家的利害といえども、それを他者に表現する方法が、実はきわめて限定されていて、その交渉の場の「設定の仕方」自体が数少ない貴重な表現媒体だ、という事実がある。

韓国側協会が、慶州という「媒体」で表現したことは、おそらくこうだ。

まず、韓国にとって日本と中国との相互的な学術書籍市場は、十分賭けていい将来的な価値があり、それは日中にとっても同様であるはずだ、という読みがある。その三カ国の定期的交流が危機收拾の局面にあるという前提のもと、非常によく考えられた設営をすべきだと考えたはずだ。舞台として、慶州や京都のような、その国の主要な古都は、施設も整い、国家外交の場合でも格の高い会場設定だとみなされる。そのような地で同じ宿舎に参加国を寝泊まりさせ、「同じ釜の飯を食う」ようにする。セミナー二日目の議事も短縮され、「史跡踏査」に当てられた。これは調印書が不調に終わった以上、三カ国の厳しい言葉による意見応酬の場は避け、同じ風光を鑑賞しながら、この寺はいい、

あの山はいいと言いつつ時間を待つことを優先し、交流当事者相互に蓄積した遺憾を緩和することが、今後の展開に資すると判断したので（このエクスカージョンへの評価は、記録集である『トライアングル』において、山口雅己理事長も指摘している）。二〇〇六年を担当する日本側協会としては、彼ら韓国がパスしてくれた球を素直につなぐのがいいだろう。つまり、慶州でペンディングにされた議論の続きをおこないながら、くわえて、友好局面を促進するような舞台の設営をおこなうことだ。

今年の京都では、主題に「十年の回顧と展望」と「大学出版部の国際交流」の二つを設定した。「十年の回顧と展望」では、この十年に各国の大学出版部（とその協会）が経験してきた、大学と出版業界の変化を総ざらいしながら、このセミナーに取り組んできた各々の立場からの思いが明らかになるはずである。また、このセミナーに将来どのような機能を期待するか、各国の率直な考えが聞けるはずだ。第二主題「大学出版部の国際交流」では、第一主題をうけて、大学出版または学術出版における国際交流の本質的な重要性が確認されるだろう。

そして、京都大学学術出版会と産業能率大学出版部のご尽力により、魅力ある京都のロケーションを最大に引き出す演出がされる。三カ国の代表団はすべて同じ宿舎に泊まり、晩餐会としては、貴船の清流に張り出した川床で本格的な日本料理が供されることが予定されている。暑い市内

を抜けて、冷涼な野外の風にあたりながら、三カ国の大学出版人が親密な時間を共有することが企図されている。

* * *

本稿の執筆現在、中国側協会は非公式にはあるが、二〇〇七年に三カ国セミナーを浙江省杭州で主催する意向を表明している。杭州は春秋時代の越国以来の古都であり、現在もマルコ・ポーロも感嘆した風光を残すことで知られる都市であるが、韓国の慶州、日本の京都と、「三カ国セミナー正常化」にむけた三カ国の古都のセミナーのリレーを、来年もしっかりと中国が受け継ぐ覚悟でいてくれるのだろうか、そう想像すると心強い。

文化の活性化へ向けて——欧米の大学出版会の活動状況について

八幡 努 (イングリッシュ エージェンシー ジャパン)

昨年、ニューヨークタイムズのベストセラーリストで、

一風変わったタイトルの本が一位になった。On Bullshit という題名の本で、著者は、Harry G. Frankfurt というプリンストン大学の道徳哲学の名譽教授である。六十ページ程度の小冊子的な体裁の本書において、著者は、“bullshit”、すなわち、「うそ」、「ごまかし」、「たわごと」、「でたらめ」などの発話現象について語源的、哲学的、社会的な考察を行っている。本書は、アメリカでのベストセラーになったということもあり、アメリカとイギリスを含む世界十四カ国で翻訳出版が決まった。日本でも、『ウンコな議論』という邦題で筑摩書房から出版されており、好評を博しているようである。注目したいのは、この On Bullshit の版元が、ランダムハウスやペンギンといった大手の商業出版社ではなく、学術系のプリンストン大学出版社であったことだ。主に学術書を出版する大学出版社から出版された本が、アメリカでベストセラーになったのであ

る。

大学出版社の本がベストセラーになるなどということは、アメリカでも非常に稀である。On Bullshit の初版部数は五千部。学術書の初刷り部数にしては比較的多いものの、版元もベストセラーを狙って出版したわけではないだろう。では、大学出版社の本がこのように多くの読者を獲得することができたのは、なぜか。この点を、欧米の大学出版社の出版活動の特質と併せて考えてみたい。

欧米の大学出版会は、通常の書籍の出版と電子出版の二つの出版活動を行っている。電子出版については、読者が各大学出版社のホームページにアクセスし、書籍の電子ファイルを購入するという方法が多いようだ。あるいは、書籍の一部分をデータ化してホームページにアップし、ホームページにアクセスした人が誰でも無料で読めるというサービスを提供している出版局もある。しかし、電子出版はあくまで副次的な出版の形態であり、インターネットが普

及した現在でも、書籍の形態で本を出版するのが主流である。したがってここでは、流通している書籍の内容と形式を検討する。

まず、出版される本の内容面について。大学出版会である以上、専門書の出版は、欠かすことのできない重要な活動である。各専門分野における最新の研究業績や知見などが本として出版される。著者は、主に大学の教授や研究者である。こうした専門書の場合、大学や企業の実験者、あるいは、専門課程に進んだ学生が読者として想定されている。実際、こうした専門書に目を通してみると、非常に高度な研究内容が書かれている。したがって、専門家や研究者にとっては有益な著作になるだろうが、その反面、一般の読者にはなかなか理解し難いため、高価格、小部数の出版になる。だが、こうした専門書の出版が継続的に行われているところを見ると、専門家や研究者に一定の需要があるようだ。

一方、欧米の大学出版会は、一般読者向けの書籍の出版も行っている。これは必ずしも全ての欧米の大学出版会に該当するわけではないのだが、例えば、プリンストン大学出版局、ハーヴァード大学出版局、マサチューセッツ工科大学出版局、オックスフォード大学出版局、ケンブリッジ大学出版局、シカゴ大学出版局などの主要な大学出版局は、専門書のほかに、一般書 (books of general interests) を多数出版する。この一般書とはあいまいな言葉であるが、

要は、限られた専門家や研究者だけを対象とした書籍ではなく、知的関心のある読者や非専門家を想定した書籍と考えてよいだろう。もちろん、一般書とは言っても学術的な主題を扱った本であることに変わりはないが、大別すると以下の二つの手法により、素人の読者にも近づきやすいよう工夫が凝らされている。

まず、高度な研究内容を平易に解説するという方法。こうした解説書を執筆する著者は、専門用語を極力使わずに最新の研究成果や難解な学問の内容を説明する。たとえば、卓抜な比喩表現を駆使して難解な量子力学の世界を明快に描写した『*The Quantum World: The Quantum Physics for Everyone* by Kenneth W. Ford (『不思議な量子』、日本評論社、二〇〇四年)』あるいは、『男女の性決定や遺伝病へのX染色体の関与を語った『*The X in Sex* by David Bainbridge (『染色体X』、青土社、二〇〇四年)』は、ハーヴァード大学出版局から出版された。どちらも、非常に専門的な内容が新書程度の平易さで解説されている。

次に、斬新な発想を用いて専門的な思考を身近にするという手法。冒頭で触れた『*On Bullshit*』はこの種の本の一つであろう。また、同じプリンストン大学出版局から出版された『*Nine Crazy Ideas in Science* by Robert Ehrlich (『トンデモ科学の見破りかた』、草思社、二〇〇四年)』は、『紫外線は体にいいことが多い』や『光より早い物質「タキオン」は存在する』などの奇説や新説を科学的に

検討し、それらの真贋度を5段階で判定するという企画であった。本書は、身近な話題と着眼点の面白さによって最新の科学的な知見を無理なく導入することに成功している。読者の関心を引く題名をつけている点も、多くの読者層にアピールするうえでは見逃せない要素である。

以上のような一般書の出版は、欧米の大学出版会に特徴的な活動と言えるだろう。では、本作りや出版形式の面ではどうだろうか。まず、書籍の背表紙には、他の研究者や著者の推薦文が幾つか記載され、カバー袖には、本の内容が比較的詳しく要約されている。さらに、多くの場合、ハードカバー版の出版から一年以内にペーパーバック版が出版される。これらは、欧米の大学出版会に独特の書籍製作方法、および、出版形式であり、より多くの読者を獲得しようとする意識を反映している。

また、出版物の翻訳権を各国の出版社にライセンスするのも重要な活動のひとつである。各大学出版会には著作権部があり、翻訳権を世界各国の出版社に売るのである。その方法であるが、まず、大学出版局が新刊カタログや企画書を準備し、国際書籍市やメールなどを通じてサブエージェントに紹介する。そして、サブエージェントが、自国の出版社に適切だと判断した企画を提案する。提案を受けた現地の出版社はそれぞれの関心に応じて企画を検討し、翻訳出版を正式に決定した場合、大学出版局は、印税の前払金という形で契約時に収入を得る。あるいは逆に、各国

の現地の出版社側からの申請を受けて翻訳権をライセンスする場合もある。いずれにしても、一冊の本の翻訳権を複数の国に販売することが可能になる点で、著作権部の仕事は大学出版局において重要な位置を占めている。

さて、以上述べたような活動を通して見えてくる欧米の大学出版会の特質とはどのようなものか。冒頭で提起した問題に対する一つの解答にもなり得ると思うのだが、それは、出版活動によって知の普遍性を追及するという態度である。専門性の高い書籍の出版は必要であり、こうした書籍に新たな研究成果が発表されることにより、更なる学問の発展や深化が可能になる。しかし、知の体系が普遍的であることを証明するためには、限られた学者や研究者だけがその体系を理解するだけでは充分ではない。知は、一般読者や専門外の人間にも理解できるよう提示される必要があるのではないだろうか。欧米の大学出版会は、この点を實現するため非常に自覚的な工夫を凝らしている。一般書の出版を積極的に行うことにより、広く読者を得ようとする点についてはすでに述べた。最新の研究成果を素人が読んでも分かるように書かれた書籍を出版するからこそ、各国にも翻訳権を売ることができると。学術書のベストセラーはこうした土壌から生まれてくるのだ。

翻って、日本の大学出版会はどうだろうか。

私は、日本の大学出版会の全体像を把握しているわけではないので、ここでは、あくまで出版されている書籍につ

いて述べるにとどめる。

専門書の出版という観点からみると、欧米の大学出版会と日本の大学出版会にそれほどの差がある訳ではないだろう。日本の各大学出版会も、学者の研究成果を書籍として出版する。こうした出版活動が、ひいては学問全体の発展に寄与することになるであろうことは、想像に難くない。だが、一般の読者が手にとりやすい書籍の出版となると、どうだろうか。欧米の大学出版会がこうした本の出版にも前向きに取り組んでいる一方、日本の大学出版会は、翻訳書だけを眺めてみても、それほど積極的に一般書の出版に取り組んでいるようには思えない。出版される本の価格も非常に高価であることが多い。助成金で書籍を購入できる研究者以外の人にはとても購入できない値段がついていることもしばしばである。大学出版会は、一般の読者が読んでも理解できる書籍を、低価格で提供することは不可能なだろうか。日本の大学出版会が学問の専門化や細分化に貢献しているのは疑いない。しかし、開かれた知、あるいは、身近な学問を提供するという点では、その活動を批判的に再検討する余地はあるだろう。

文化は、専門家だけではなく素人の素朴な発想や疑問によって活性化されることもあるだろう。大学出版会が、活性化された日本文化という大樹を生育する土壌となることを望む。

北海道大学 総合博物館



北海道大学総合博物館。北大で最も古い本格的な鉄筋コンクリート建築（写真提供：吉田尚生）

北海道大学総合博物館は、大学のメインストリートに面した旧理学部本館を利用して、一九九九年に発足した。ロマネスク様式やゴシック様式を加味した欧風の堂々たる外観を呈する本館は一九二九年（昭和四年）の建造で、北海道大学で初めての本格的な大型鉄筋コンクリート建築物である。総合博物館は、本館正面から南翼一帯を主体とした三階建てで、まだまだ手狭なスペースながら、膨大な学術標本・資料群の収蔵と、これらを用いた研究・高等教育、それに展示や普及活動が活発に行われている。

正面玄関から中央階段を上ると、アインシュタインドームと呼ばれる吹き抜きのドーム空間がある。最上階のドーム壁面には、果物（朝）、ヒマワリ（昼）、コムリと一番星（夕方）、フクロウ（夜）を描いた円形の陶版レリーフがはめ込まれており、昼夜の別無く学問研究に励めという想いが込められている。

展示室は三つの大テーマに沿って構成されている。北大歴史展示と学術テーマ展示、学術資料展示である。北大歴史展示には、北大の前身である札幌農学校に関する文書や当時の学生のノートなど、建学の精神の礎となるさまざま資料が展示されている。中でも「実学の精神」コーナーには、ウサギの耳へのコールドター塗布によって作出された世界初の人口癌標本（市川厚一・獣医学）を始め、通底する農学校精神がいかに華開いて来たか、その歩みが巧みに紹介されている。

学術テーマ展示は、北大における膨大な研究テーマからいくつかを紹介しているものである。特に興味深いのは二階の「サステイナブル・キャンパス」で、連続と受け継がれ、発展して来た標本や器具、それに校舎の設計図面や復元模型などが所狭しと並べられ、知を生み出す母体となった多くの資料を目にしたながら、研究の歩みを知ることができる。また、「ミュージアム・ラボ」として考古学の研究室と収蔵庫が公開されており、オホーツク文化研究の成果と合わせ、大学の研究室や標本庫の内部の様子を、まさに生きた状態で目にする事ができる。

所在地 千060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
 開館時間 10:00～16:00
 (但し6～10月は9:30～16:30)
 休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合は連休明けの平日が休館)、年末年始
 この他、大学行事で臨時開館や臨時休館の場合があります。
 電話 011-706-2658
 F A X 011-706-4029
 U R L <http://www.museum.hokudai.ac.jp/>



大学からの文化の発信を目指す新しい試み。博物館前のウッドデッキで北大交響楽団による野外コンサートを開催(写真提供：加藤ゆき恵)

学術資料展示は博物館の中核をなす展示であり、地質鉱物・化石・獣医骨格・昆虫・植物などの自然史標本が整然と展示・解説されている。三階には、長尾巧によって一九三三年(昭和八年)に南樺太から発掘された一四〇〇万年ほど前の大型水生哺乳類デスマスチルスの全身骨格があり、当時の発掘映像や記録写真なども残されている。また、北海道には多くの火山や鉾山が存在し北大のフィールドとなっているが、研究で収集された鉱物・原石なども多数展示されている。獣医骨格標本の展示室は、獣医学部の学生たちの手によって作られた労作だ。北海道大学には四百万点を超す学術標本があり、その中には約一万一千点のタイプ(模式)標本が含まれている。北大は札幌農学校時代の一八九六年(明治二十九年)、松村松年によって我が国最初の昆虫学教室を設置した。以来、蓄積された昆虫標本は二百万点を超え、今日も世界各国から問い合わせが絶えない。一方、一九〇三年(明治三十六年)に宮部金吾により植物学教室が発足して以来、陸上植物標本庫には千島・樺太産植物を含む約三十五万点の腊葉標本群が、藻類標本庫には約十四万点とアジア随一の海藻標本コレクションが構築されている。このほかにも、標本に基づく分類学を重視した学風が農学校以来の北大における伝統であり、全国的に分類学が衰退の傾向にある中でも、基礎学問の研究教育が脈々と続けられてきた。総合博物館では、これらの貴重な学術標本を整理・登録し、データベースを公開するなどして、世界中からの研究利用に供している。

一方で、こうした学術標本の多くが未整理の状態にあることも事実である。標本の整理作業は、博物館の専任教員だけでなく、代々の臨時職員や学生たち、博物館ボランティアなどの多くの人々の努力によって、地道に進められている。展示は総合博物館の顔であり、研究がその基礎となる。しかし、その根底にはさらに標本・資料の收藏と整理という土台がある。その土台を支えるために、無名の多くの人々による絶えない労苦がある。

持田 誠(北海道大学出版会)

大学出版部ニュース

大学出版部協会が有限責任中間法人となつて九カ月が経過した。新年度を迎えるにあたり、二〇〇五年度の主だった協会行事を改めて振り返ってみたい。

○有限責任中間法人大学出版部協会設立報告会（開催日：二〇〇五年七月二十九日（金） 開催場所：日本出版クラブ会館 参加者：五六名）

報道関係一三社一四名、販売会社五社六名、出版関連団体六団体七名、協会側もあわせて五六名の出席者を得ることができた。山口雅己理事長から有限責任中間法人大学出版部協会の設立報告と法人化の意義などが説明された。関連記事は「北海道新聞」（八月七日読書欄）、「新文化」（八月四日）、「新聞之新聞」（一〇月三日）などで紹介された。

また協会の法人化については、山口雅己理事長による「活発化する大学出版部」〔出版ニュース〕二〇〇五年九月中旬号）がある。まだの方は是非ご一読を。

○夏季研修会（開催日：二〇〇五年八月二五日（木）～二七日（土） 開催場所：アパホテル福岡渡辺通 参加者：六十三名）

二〇〇五年度の夏季研修会は、九州大学出版部の所在地福岡で開催された。名古屋大学出版部の橋宗吾氏によるケーススタディーと各出版部の企画説明会には、福岡地区の書店さんと販売会社様八名にご参加いただいた。これは編集部会と営業部会による共同企画であり、協会活動にとつても特筆に価する試みであった。この成果は二〇〇六年度編集部会事業計画にも継承され、次なる展開が予定されている。

○第九回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー（開催日：二〇〇五年一月一日（水）～一日（土） 開催場所：慶州市（大韓民国） 参加者（日本側）：一四名）

一時中断後の三方国セミナーであったが、中国側の参加もあり、本来の姿に復して開催された。日本側からは小野利家氏（京都大学学術出版会）と釘澤雅春氏（玉川大学出版部）の二名が講演者として壇に登った。訪韓団の記録「GYEONGJU 2005 TRIANGLE ADVENTURE」をよみ一読の上、二〇〇七年開催

予定の杭州セミナーには是非ご参加を。

○有限責任中間法人大学出版部協会臨時社員総会（開催日：二〇〇五年一月二五日（金） 開催場所：東海大学校友会館）法人化以降、初の総会となった「臨時社員総会」では、「二〇〇五年度事業計画案」と「二〇〇五年度予算案」の審議・承認が行われた。四部会および事務局の事業計画案には活発な質問が寄せられて質疑応答が行われた。臨時社員総会で合意・承認を得た事業計画は、二〇〇六年度の四部会・事務局事業計画に盛り込まれて実行される。

○有限責任中間法人大学出版部協会設立感謝の会（開催日：二〇〇五年一月二五日（金） 開催場所：東海大学校友会館 出席者：一〇〇名）

設立感謝の会は、七名の出版部代表者様にご参列いただき、臨時社員総会後に併催された。協会顧問の方々や報道関係各位、協会関連業者様の参加もいただき、法人化に期待するお言葉を多数いただいた。

北海道大学出版会

▼岩崎徹著『馬産地80話―日高から見た日本競馬』(四六判・1890円) 日本競馬の世界に誇るべき特徴は大衆競馬にあり! 日高地方を中心とした競走馬生産と馬産地のしくみをわかりやすく解説し、著者年来の主張を提言する。▼小川正博・森永文彦・佐藤郁夫編著『北海道の企業―ビジネスをケースで学ぶ』(A5判・2940円) セイコーマートなど北海道の各産業分野を代表する企業12社を取り上げ、その経営理念・企業文化、経営戦略、マーケティング、企業間競争などを具体的に調査・分析した。▼中尾佐助著『中尾佐助著作集Ⅱ 料理の起源と食文化』(A5判・14700円)・『中尾佐助著作集Ⅴ 分類の発想』(A5判・12600円) 第Ⅱ巻では「農耕文化基本複合」という概念を提唱した中尾の「種から胃袋まで」を通観する著作を収録。「中尾食文化論」として集大成した。第Ⅴ巻には「思考のルールづくり」という思考様式、処理法を提唱した中尾の「分類」観を大観する著作を収録。独創的発想と徹底的な実証研究から導きだされた「中尾」分類「観」を集大成した。

東北大学出版会

▼原口尚彰著『信じることと知ること―新しいキリスト教概説―』(A5判、一九八頁、一五七五円(税込)) 本書は、大学でキリスト教を学ぶ人たちが、キリスト教に関心を持ち、体系的な知識を求めている一般の人々を対象にして、キリスト教の基本を解説することを目的としている。キリスト教を学ぶことの意義は、様々な問いを立て、自分なりの答えを考えながら、神と世界と人間に関する認識を深めることにある。本書は、キリスト教の解説に主眼を置くのではなく、様々な問いや答えの可能性に目を向け、ともに思索することへと読者を導くところに特徴がある。

▼松野将宏著『地域プロデューサーの時代―地域密着型スポーツクラブ展開への理論と実践―』(A5判、一九四頁、三一五〇円(税込)) 今、プロデューサーの人間が求められている。本書では、地域で活躍する「地域プロデューサー」に焦点をあて、その役割やプロデューサーになる方法等を示した実践の書。「地域密着」が、プロ野球再編で脚光を浴びたように、現代のキーワードとなっている。

流通経済大学出版会

▼金淵明編/韓国社会保障研究会訳『韓国福祉国家性格論争』(定価五〇四〇円) いま、東アジアが熱い。政治や経済のみならず社会保障制度や福祉国家研究の分野でも多くの人がいっせいに中国や韓国、台湾等東アジアに目を向け始めている。これらの諸国間で研究者ネットワークをつくる動きもある。

注目を浴びている当の韓国ではいま、一九九七年の経済危機後におこなわれた金大中政権下での福祉関連諸制度改革(生産的福祉)の評価をめぐって熱い論争が展開されている。それは新保守主義的改革と理解すべき性格のものである、いやむしろ国家福祉の拡大とみるべきものである、といった主張が相譲らず対峙しているのである。金淵明(韓国中央大学教授)編『韓国福祉国家性格論争』は、韓国の錚々たる研究者一〇名による侃々諤々の、こういった熱い議論一七編を編者が論争風に編集したものである。本書はまた、韓国の社会保障制度や福祉国家研究が現在いかなる状況にあるかを知るための格好の書物でもある。

聖学院大学出版会

▼古屋安雄、倉松功、近藤勝彦、阿久光
晴編『歴史と神学——大木英夫教授喜寿
記念献呈論文集 上巻』(A5判上製、
八四〇〇円)

日本における神学、また社会倫理、教
育の分野で大きな影響を与えてきてい
る大木英夫教授の喜寿を記念する献呈論文
集。大木教授の神学、思想は、「正典と
しての聖書に基づきつつ、社会変動の歴
史的動向を洞察し、その上で人間と世界
また日本の現実の深層次元に肉薄する衝
撃力に富んだ思想である。その内容はエ
ネルギッシュな『政策力』となって展開
されるところにその真骨頂がある。思想
の全面に『共同体形成』の意志が打ち出
され、古い日本の共同体を『新しい共同
体』へと転換させる気迫が鮮明に表明さ
れる」(献呈の辞、編集世話人代表、近
藤勝彦)。その影響を直接的に間接的に
受けた執筆者たち四四名による論文集で
ある。その執筆者の専門領域も、神学、
聖書学、社会倫理の分野にとどまらず、
思想史、歴史、文学、医療政策など幅広
い。海外からの寄稿も含む。下巻は二〇
〇六年六月刊行予定。

聖徳大学出版会

「心と身体の癒しシリーズ」の第三巻
『こころとスポーツ』(花沢成一・永島
正紀著)は、刊行が予定より遅れていま
すが、現在執筆進行中です。

既に、予告しました第四巻の内容につ
いて報告致します。第四巻は本学の臨床
心理学研究科の科長岡堂哲雄教授で、タ
イトルは『家族心理臨床入門』。家族力
の回復にむけて。となっておりま。

今日の世相は混沌として悲惨な事件が
多発している。こうした事件の背景に家
族関係の大きな変貌があると著者は指摘
する。

「家族は人間の生存と子孫の養育のため
には必須の制度である」といわれてきた
が現在は生存の条件として必ずしも「家
族を持つ必要がない」状況となっている。
しかし人間にとって「子どもが健康に成
長するには母子の絆と」「父親を含む親
子の絆が健全な発達には不可欠」と強調
し、家族力の回復にとって父親の存在が
大切なポイントの一つであることを臨床
心理学の視点から論究していて注目され
る内容となっている。

麗澤大学出版会

▼トーマス・リコーナ著／水野修次郎・
望月文明訳『人格教育』のすべて——
家庭・学校・地域社会ですすめる心の教
育(四六判・二九四〇円) 人格(道徳)
教育の第一人者が説く、子どもの心を育
てる一〇〇の法則。原理・原則に基づい
た人格教育——子どもの徳性を最大限の
ばす教育——で、子どもの心は安定し、
学業成績も向上する。親と教師の必読書。

▼日吉眞夫著『屋久島——日常としての
旅路』(四六判・二二〇〇円) 混沌とした
走の極にある日本列島——著者が「生命
の島」と名付ける南の島・屋久島からは
どう見えるだろうか。東大全共闘、メー
カー勤め、独立自営と波乱の都会生活を
閉じ、大自然の中で原始と生の根源を見
つめる生活を選んだ著者の悠々たる語り、
熱きメッセージ。清々しいエッセイ集。



『屋久島——日常としての
旅路』定価2100円

慶應義塾大学出版会

- ▼野村浩二著『資本の測定 日本経済の資本深化と生産性』（六五一〇円）生産と資本、資本と生産を結ぶ整合ある測定を行い、高度成長期から二〇〇〇年までの経済成長を描いた本格的実証分析。（二〇〇五年度第四八回 日経賞受賞）
- ▼消費経済学体系全3巻 1『消費経済理論』、2『流通・マーケティング』、3『消費者問題』（各巻三三六〇円）より豊かな消費経済社会の実現のため、各領域の先端的課題とその解決法を提示。
- ▼栗原潤著『日本の知識戦略 ハーバードでの経験から』（二二〇〇円）世界中から第一線の人々が集い新たな知見を生み出してゆくプロセスを、生き生きと紹介。
- ▼山田辰雄・家近亮子・浜口裕子編『橋樑 翻刻と研究―『京津日日新聞』―』（二五七五〇円）大正一一年から大正一二年に、『京津日日新聞』に掲載した論説記事三三四編を翻刻。
- ▼中矢一義監修『公共ホールの政策評価―指定管理者制度―時代に向けて』（四七二五円）文化施設の実地調査にもとづき、公共ホールの総合的な評価指標を開発し、ホール運営のあり方を提言。

産業能率大学出版部

- ▼（学）産業能率大学総合研究所編著『チエンジ・エージェントが組織を変える 組織変革実践ガイド―トップと現場をつなぐ組織変革の実践的方法論―』（二五二〇円）
- 組織変革における実行の側面、すなわちいかに変革プログラムを動かし、現場に変革を浸透させていくかという点について、様々な変革プロジェクトの企画・実行を課題とする、実務家の方々に主たる読者としてシミュレーションしながら、具体的な方法論を、長年多くの企業で組織変革のコンサルティングに携わってきた編著者が論じる。
- ▼鶴岡公幸・石原美佳著『図解でわかるヒューマンキャピタルマネジメント―人材資本を活かす100のキーコンセプト―』（二二〇〇円）
- ヒューマンキャピタルマネジメントの醍醐味とは、組織に所属する人材を企業の価値を高めリターンをもたらす資本に変換する仕組みをつくることにある。
- 本書は人事・研修の重要なテーマ100項目を選定し、そのエッセンスを図解をふんだんに使って解説。

専修大学出版局

- ▼高橋原著『ユングの宗教論―キリスト教神話の再生』（三三〇四五円）
- ユングが展開した「神学」は異端的、異教的であり、時に新宗教やカルトとも並び称される。本書は、ユングの宗教論の特徴を、彼が生涯にわたって行なった対話と論争という局面において明らかにし、キリスト教の神話を発展させようとした思想家としてのユングの孤獨な一面に光を当てる。
- ▼齋藤雄志著『知識の構造化と知の戦略』（三〇四五円）
- 知識や情報を管理するのがメタ知識であり、高度な思考や行動を行う上で不可欠なものである。本書はシステム思考のメカニズムを解明し、情報の収集や整備や発信について考察する。
- ▼中野育男著『米国統治下沖繩の社会と法』（三三二八〇円）
- 「アメリカ世」と呼ばれた一九四五年から七二年まで、沖繩は特別な法システム化にあった。公的扶助の形成、医療保障の沿革、住民福祉制度など、社会・福祉法令の形成過程と特質、機能などを検討・解明する。

大正大学出版会

▼倉島節尚編『宝菩提院本類聚名義抄和訓索引』(B5判 近刊予定) 平成十四年に『宝菩提院本類聚名義抄』(B5判182頁)を刊行した。本書はその続編の索引である。平安時代の漢字辞書である『類聚名義抄』には、原撰本と改編本があり、原撰本は一部分しか伝わらず、宮内庁図書寮本が現存するのみである。改編本は天理図書館所蔵(国宝)の観智院本のみが完本で、他に零本が四種伝わる。この宝菩提院本はその一つである。宝菩提院本には一〇の部首の漢字だけが、4000余語の和訓が記されている。新たに公開された資料で、多くの関心を集めた。この宝菩提院本と観智院本の二本について、検索を容易ならしめる。

▼小此木輝之編『安楽律院資料集』第三(A5判 470頁、定価二一、〇〇〇円)、金子寛哉著『釈浄土群疑論の研究』(B5判 650頁、定価一三、六五〇円) 弓山達也編『今、宗教家はどのように育成されているのか』を近刊予定。

玉川大学出版部

▼紀宮清子編『ジョン・グールド鳥類図譜 総覧』(B4判横・二〇、〇〇〇円) 一九世紀の画家・鳥類学者グールドが制作した図譜は、総数三千点に及ぶ。世界各地の鳥類の生態が生き生きと描かれ、歴史上最高級の図譜と賛美されている。本書は、図譜全巻の鳥名リストを作成し、現在の学名・英名・和名を対応させたもの。口絵に各図譜の代表作八〇点を掲げ、索引を充実させた。清子内親王殿下の研究の成果。



『ジョン・グールド 鳥類図譜 総覧』限定800部

中央大学出版部

▼楠美憲章著『リーダーのための企業変革論―日産改革の視点と教訓』(二四一五円) 日産副社長として日産改革を推進した著者が日本の企業に相応しい変革のあり方を具体的に提言する。

▼高柳一男著『エンロン事件とアメリカ企業法務―その実態と教訓』(三〇四五円) 企業不祥事で初めて批判の鋭い矛先が法律家にも向けられた事件。国際企業法務の専門家が事件の全容に迫り、企業法務の問題点を明確にする。

▼B・エチエンヌ他著『政治学とはどのような学問か』(二七八五円) ブルデュエーの科学的知をめぐる論考をベースに政治学の学問的自立性獲得の歴史を追う。浪岡新太郎訳。

▼細野助博著『政策統計「公共政策」の分析ツール』(二八八五円) 地方分権、国と市場の二分法脱却、コミュニティ復権をキーワードに全行政マンに贈る統計ハンドブック。

▼市場俊之著『男子体操競技―その成立と技術の展開』(三三七〇円) 各種目の発達を詳細に分析する。百年を括る規定演技一覧は史資料としても貴重。

東京大学出版会

▼シリーズ「がん研究のいま」

全4巻完結

日本人の三人に一人ががんで亡くなっている現在、がん医療は国民的関心事となっている。本シリーズは文部科学省のがん研究プロジェクトの成果であり、がん医療を支えているがん基礎研究の最新線と展望が明らかになる決定版である。

1巻『発がんの分子機構と防御』、2巻『がん細胞の生物学』は、発がんのメカニズムやがん細胞の挙動について、遺伝子・分子・細胞・組織のレベルで解説。3巻『がんの診断と治療』では、遺伝子解析で可能になった、個人やがんの特性を生かした診断と治療を紹介する。4巻『がんの疫学』は日本人に多いがんに焦点をあてて、がん予防へのアプローチを論じている。(各二二八二五円)

編集代表 鶴尾隆／谷口維紹
編集幹事 秋山徹／宮園浩平
1 笹月／野田編

『発がんの分子機構と防御』

2 高井／秋山編『がん細胞の生物学』

3 中村／稲澤編『がんの診断と治療』

4 田島／古野編『がんの疫学』

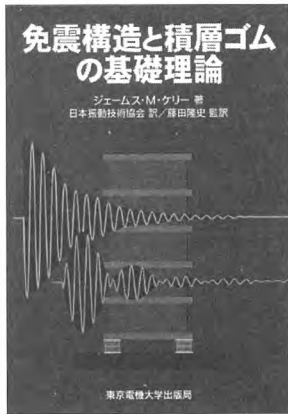
東京電機大学出版局

▼『免震構造と積層ゴムの基礎理論』

(J・M・ケリー著／日本振動技術協会訳／藤田隆史監訳／三九九〇円)

地面と建物間に何らかの支持材やエネルギー吸収装置を置き、地震被害を軽減させようとする「免震」の考え方は、革新的な耐震設計手法としてこの一世紀の間に様々に試みられてきた。

主に積層ゴムを用いた免震構造研究の世界的なパイオニアである著者が、ゴムの力学的特性等を踏まえ理論的に免震構造を解析、建築物の設計応用に向けて解説する。免震を一般的に解説した書籍は多くあるが、特に積層ゴムに限った工学的な理論書としては本書が随一である。



東京農業大学出版会

▼『漆器の弁当箱・食籠・盆』東京農業大学前田祐志監修

漆を磨ぐ、盆をとぐ……。とぎの魅力にせまる。暮しにとけこんだ伝統文化、先人の暮しの知恵と手仕事の魅力を示す写真と解説。

平成一七年九月／A五判
一一二頁／税込価格一六八〇円

▼市民の森林(やま)づくり 東京農業大学森林政策学研究室監修

世田谷区の小学校五年生を対象に群馬県川場村で実施している移動教室がある。農業体験、林業体験、川遊び、登山等の体験学習だ。森林を活かす知恵とこれまでの成果が専門家の目で紹介されている。

平成一七年八月／新書版
一五六頁／税込価格八四〇円
(シリーズ・実学の森)

▼情報学の楽しさ 東京情報大学編

情報を学ぶ、活かす、つなぐ、創る、読むの四つの視点でまとめられている。情報学の広範な内容と楽しさを知ってもらうことのできる一冊

平成十七年七月／四六判
三一六頁／税込価格一〇五〇円

法政大学出版局

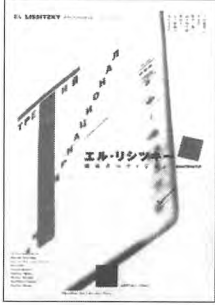
▼『図説 からくり人形の世界』（千田童子著／A5判／七六六五円）からくり人形は江戸時代、ものづくりに優れた職人たちが知恵と技術を駆使して作り出した自動機構であり、今日も各地の祭りや奉納芸を演じている。からくり人形の宝庫である愛知県をはじめ、全国各地のからくり人形の山車や興行を探訪してその由来と現状を豊富な写真と共に紹介。人形にまつわる人々のなりわいと、地域に根づいた伝統芸能の魅力の秘密を探る。

▼『キリスト受難詩と革命——1810～1910年のフィリピン民衆運動』（レイナルド・C・イレート著／清水展・永野善子監修／川田・宮脇・高野訳／四六判／五〇四〇円）スペインと米国の二つの植民地支配に対するフィリピン民衆の抵抗運動はどんなものであったか。未刊行の一次史料や既刊文書を渉猟して民衆間で伝承される歌や詩や宗教伝統などを掘り起こし、なかでもパシジョン——キリストの生涯と復活についての現地住民による語りや、変化を志向する運動の文化的枠組みを築いたことを鮮明に描きだす。

武蔵野美術大学出版局

▼『エル・リシツキー——構成者のヴィジョン』（寺山祐策編 多木浩二十勝井三雄十向井周太郎・新島実十五十殿利治十本庄美千代著 B5判上製・四色刷・256頁・図版多数、定価五八八〇円）

二〇世紀初頭から一九二〇年代にかけてロシア及びヨーロッパでは数多くのデザイナーたちによる実験的作品が次々に生みだされた。「造形思想のアヴァンギャルド」とでも呼ぶべき芸術・デザイン運動が潮流を成し、同時にユートピアの形成を目指した社会改革的な近代のプロジェクトとして展開してゆく。本書はこれまで語られることが少なかったロシア構成主義のエル・リシツキーを中心に、その活動と思想、稀少なモダン・タイポグラフィ作品を一挙紹介する。特製フォトモンタージュ豆本つき。



明星大学出版部

▼津久井喜子

『破壊からの誕生——原爆文学の語るもの』

A5判・一五〇ページ 二二二五円

原爆文学を生み出したものは、比類なき被爆体験を伝えたという、核戦争を繰り返してはならないという作家の悲願と、平和への切望を込めた強い意思であった。

大田洋子、正田篠枝、峠三吉、栗原貞子、原民喜、林京子の諸作品、そして井伏鱒二『黒い雨』、堀田善衛『審判』を取り上げ、ホロコースト文学との関連も視野に入れつつその意義を論ずる。

▼阪井恵・小山真紀・木暮朋佳・中里南子

『五線譜の約束』B5判・一〇〇ページ・一三六五円

小学校の教員、音楽の教員をめざす学生のための、音楽科教育Iのテキストとして「五線記譜」をもとにした音楽の約束をわかりやすく説明する。拍・リズム・テンポ、音符と休符、音程、音階、調号、和音、コードネーム、記号と用語などを初歩から学ぶ音楽への入口。

早稲田大学出版部

- ▼『建築産業再生のためのマネジメント講座』（早稲田大学建築マイスタースクール研究会編、二七三〇円）構造不況業種といわれる建築業界。受注・設計・施工を初めファイナンス、リニューアルなど新たな課題を検討し、建築産業再生の方法を探る。早大理工総研シリーズ23。
- ▼『国民国家と家族・個人』（田中真砂子・白石玲子・三成美保編、四二〇〇円）国家の政策・法などは、個人や家族のあり方にどんな影響を与えるのか。家族と国家の関係について具体例をもとに考察する。シリーズ比較家族第三期第3巻。
- ▼『日常を生きる教育論』（渡辺重範、二二〇〇円）事故、災害、戦争等によって、突然、奪われる日常。この日常のかけがえのなさを、いかに生徒に伝えるか。詩や小説、映画などさまざまな話題に託して「日常」の大切さを語る教育論。



東海大学出版会

- ▼香川県歴史博物館編集『高松松平家所蔵 衆鱗図（全4帖+研究編）』（A4変型判、一八九〇〇円）
- 衆鱗図は、十八世紀に高松松平家の藩主、松平頼恭の命により編纂された原色魚介類図譜（全4帖、七二〇種掲載）であり、近世の博物学に大きな影響を与えた図譜である。今回、新たに、生物学的解説を加えた研究編を刊行する。
- ▼菅原道夫著『ミツバチ学—ニホンミツバチの研究を通し科学することの楽しさを伝える』（A5変型判、二九四〇円）
- 高校の教員であった著者は、理科教育の実践には直接自然に触れることが必要であると考へ、常に研究の場に身をおいできた。最後に研究対象にしたニホンミツバチは著者を魅了し、退職を三年も早めてしまったほどである。
- 本書では、ニホンミツバチの生息調査に始まり、ランに集結する現象などの研究の現状、これからの研究のテーマ、さらには飼育から採蜜までが、ミツバチの生活と共に語られる。また、生物研究の発想から報告までを、著者の経験に基づいて紹介している。

名古屋大学出版会

- ▼メノカル著 足立孝訳『寛容の文化—ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン—』（三九九〇円）「世界の宝飾」と呼ばれた輝ける土地の記憶。
- ▼梶田孝道編『新・国際社会学』（二九四〇円）国際問題の構造変化を、明晰なアプローチで解説した格好の新人入門。
- ▼竹本洋著『国富論』を読む—ヴィジョンと現実—（二八九三〇円）経済学の約束は果たして実現されたのか。
- ▼梅田百合香著『ホップズ 政治と宗教—「リヴァイアサン」再考—』（五九八五円）宗教抗争から近代国家へ—宗教論の徹底的な読解から新たな像を描出。
- ▼森康友編『法曹の倫理』（三九九〇円）実務感覚に裏打ちされた記述で、一貫した説明体系を提供するテキスト。
- ▼勝又義直著『DNA鑑定—その能力と限界—』（二八三〇〇円）個人識別と親子鑑定について、第一人者が基礎から詳しく解説。鑑定の等身大の姿を示す。
- ▼高柳泰世他編『視覚代行リハビリテーション—視覚障害者と高齢者のために—』（二七三〇〇円）質の高い生活に向けた訓練法や補助具、工夫について幅広く解説。

三重大学出版会

■神松一三著『正力松太郎と日本テレビ放送網構想』四六版一八〇頁(本体一八〇〇円+税) 戦後もっとも成功した「呼び屋」

前書き／1章日本テレビ放送網のプロトタイプ／2章GHQの思惑／3章電波監理委員会の役割／4章メガサイクル論争／5章正力松太郎の追放解除／6章正力発言・柴田発言の検証／7章日本テレビ放送網構想の挫折／後書き

■井谷泰彦著『沖繩の方言札―さまよえる沖繩の言葉』A5版一七五頁(本体一八〇〇円+税)

1章「方言札」の復元、2章「方言札」とエスニシティ／「方言札」ができる時／「方言札」ができる理由／3章村内法と罰則／普通語時代の「方言札」／標準語励行期の「方言札」／4章「方言札」の消滅／戦後の言語教育と「方言札」／沖繩語の未来

■第三回日本修士論文賞受賞者 ○吉田茂(国会議員秘書) 荒川洋子(教員)

京都大学学術出版会

▼「学術選書」(四六判並製・二五〇頁平均、定価一五七五〜一八九〇円、月一冊以上配本)「分からないから面白い。サイエンスの世界へ」——科学の本質ともいえる謎解きの楽しさは、「これ一冊でわかる〇〇学」といった類の本ではつかめない。最新の知見やユニークなアプローチはちょっと難しいかもしれないがとてつもなく魅力的だ。第一回配本は、

①土とは何だるうか?(久馬一剛)、②子どもを脳を育てる栄養学(中川八郎)／葛西奈津子)、③前頭葉の謎を解く(船橋新太郎)、④古代マヤ石器の都市文明(青山和夫)の四冊。

▼「日本の大学アーカイブズ」全国大学史料協議会編(四二〇頁・五〇四〇円) 大学の歴史資料の収集そのものは古くから取り組まれたが、「大学史料とは、大学史研究とは何か」という根本的な問いや方法論の開発は、意識的になされてこなかった。この現状を総括し、現実に対応している各大学の史料研究・保存の多様性に立脚して、大学史研究の在り方を模索した初の論集。全国の「大学史料館」の一覧と紹介も完備。

大阪経済法科大学出版部

▼白樂勳(はくえいくん)著 アジア研究所研究叢書『東アジア政治・外交史―「間島協約」と裁判管轄権―』(定価四四一〇円)一九〇九年に日本が清国と締結した「間島協約」と間島地方(現在の中華人民共和国吉林省延辺朝鮮族自治州の一部)に居住する朝鮮民族をめぐる日本政府と中国政府との交渉過程を検討することによって、当時の日中両国の政策判断と居住朝鮮人の動向を明らかにする。中国側は、朝鮮人に対する中国への帰化政策を推進する一方で、非帰化朝鮮人に対しては日本側の侵略の小卒兵として駆逐・排除するという政策をとり、間島地方だけでなく、満州に居住する朝鮮人社会に大きな分裂・混乱が生じることになる。日中両国は、間島地方の朝鮮人に対する支配権(裁判管轄権)をめぐる、対立を繰り返してきたが、それは、日本側の介入強化による「間島協約」の有名無実化ということ、間島居住朝鮮人を独立派・親中国派・親日派というグループに分裂させていくことに帰結したといえる。こうしたプロセスを本書は、丁寧に分析している。

大阪大学出版会

- ▼森岡裕一著『飲酒／禁酒の物語学—アメリカ文学とアルコール』A5判・並製・二三二頁 定価二一〇〇円 二〇世紀初頭のモダニズム文学を飲酒の視点から読み直す。
- ▼前田芳信編『スポーツは良い歯から』A5判・並製・八二頁 定価一〇五〇円 スポーツと歯の関係を中心に、噛合せと運動の関係、マウスガードの重要性などスポーツをする方にとって重要なファクターをわかりやすく解説。
- ▼笠井秀明他編『計算機マテリアルデザイン入門』A5判・並製・四〇〇頁 定価二六二五円 量子力学に基づいた信頼性の高いシミュレーションによる「第一原理計算とそれに基づく物質・デバイス・プロセス・デザイン」基礎と応用を解説。
- ▼多胡圭一編『日本政治—過去と現在の対話』A5判・並製・三〇〇頁 定価二二〇〇円。
- ▼島田彌著『学生・技術者育成の研修システム—自主性・創造性喚起の具体的手法』A5判・並製・三九八頁 定価三三〇〇円。

関西大学出版部

- ▼妹尾剛光著『ロック宗教思想の展開』(A5判・五七七五円) 宗教及び宗教と関わりの深い領域についてのロックの思想を、初期草稿から代表的諸著作、それらをめぐる宗教論争、死後出版された『パウロ書簡 義詁と注』に到るまで跡付けて、信仰、自然法、寛容を要とする宗教思想がロック思想全体の根底であることを示し、通説的近代理解が見ていなかったロック思想の実像を明示する。
- ▼亀井克之著『経営者とリスクテキーグ』(A5判・三六七五円) リスクマネジメント(RM)とは、〇の欠如を充たして情報(Into)とリスク処理実行(Action)とを結ぶ戦略的意思決定(リスクテキーキング)であるという「Infor-Eation モデル」に基づく独自の事例研究集。
- ▼高橋隆博・森隆男・米田文孝編著『博物館学ハンドブック』(A4判・一九九五円) 博物館を取りまく環境の変化や多様な問題に対応できる学芸員が、今まさに求められている。本書は学芸員をめざす人たちのための、図版を多用したビジュアルで手軽な入門書である。

関西学院大学出版会

新刊

- ▼村尾信尚責任編集
もうひとつの日本を考える会
『日本を変えるプランB』次世代に希望ある社会をつなぐための提案。(四六上製・一九六頁・定価一六八〇円)
- ▼紺田千登史著
『フランスの哲学—そのボン・サンスの伝統と日本、アメリカ』フランス哲学と日・米の思想家の接点を探る。(A5上製・三二八頁・定価四四一〇円)
- ▼渡邊 力著
関西学院大学研究叢書『求償権の基本構造—統一的求償制度の展望』求償権の具体的な適用場面を想定し個別に考察。(A5上製・三〇〇頁・定価四二〇〇円)
- ▼武田 丈編著
『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー』彼女達の現状とその背後にある問題とは。(A5並製・二一六頁・定価二二〇五円)

▼新井光吉著『勤労福祉政策の国際展開—アメリカからイギリス、カナダへ—』（A5判・二四〇頁・二九四〇円）グローバルリズムのもとに進行する福祉国家の解体過程を分析する。

▼福元圭太著『青年の国—ドイツとトーマス・マン—二十世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛—』（A5判・三八六頁・五六七〇円）「エロスと文学と政治」の特殊ドイツ的あり方を解明。

▼稲葉継雄著『旧韓国—朝鮮の「内地人教育」』（A5判・三八四頁・八一九〇円）韓半島における日本人（居留邦人・内地人）の教育の全体像を解明する初の試み。

▼萩島哲編著『名所空間の発見—地方の名所図録図会を読む—』（B5判・一二二頁・二四一五円）図録・図会と地形図から「絵になる空間」を発見する。

▼宮入慶之助記念誌編纂委員会編『住血吸虫症と宮入慶之助—ミヤイリガイ発見から九十年—』（B5判・二九〇頁・五七七五円）日本住血吸虫症の研究史、中間宿主の発見者宮入慶之助の業績と人間像、感染病理、日本における根絶、世界の感染現状、根絶の新技术を描く。

部会だより（電子部会）

ウェブサイトの十年と電子部会の課題

大学出版部協会でウェブサイトを立ち上げたのは九八年であった。そのころはまだ九大学出版部しかウェブサイトを開設していなかった。いまは二十八の大学出版部がそれぞれウェブサイトをもちにいたった。この十年でインターネットの環境は劇的に進展し、ウェブサイトの役割も大きく変化した。

変化のひとつは、ウェブサイトを協会の広報的な機能を果たすことから、情報発信型を旨指すことになったことである。毎月メールマガジンを発行し新刊案内を発信している。またTFMインタラクティブのインターネット放送で協会出版部が発行する書籍の紹介番組「TV Book Lounge」の制作に協力している。これまでに紹介した書籍は百点を越えた。ウェブサイトはウェブサーファアを迎えることから、検索エンジンで書籍を探す方向へと大きく変わった。ウェブサイトはこれまでより書籍の販売に直接結びつく性格を持っている。

さらにウェブ上を学術情報が流通する量が爆発的に増えている。国立情報学研究所が推進する紀要論文の電子化プロジェクトが進められているし、また学会誌の電子版がJIS TAGEで三百以上公開されている。学術情

報を書籍として出版してきた大学出版部もこの状況の中で、どのような動きが可能かを模索する必要に迫られている。

電子部会の事業計画

法人化した協会の事業計画として、電子部会は、インターネット環境の大きな変化の中で三つの事業を進める。

第一は、協会ウェブサイトによる大学出版部の書籍の紹介である。アメリカ大学出版部協会ではBooks for Understandingという現代の課題に答える書籍の紹介をしているように現代の日本の課題に取り組む書籍の紹介をする。現在、二十の主題が検討されている。

第二は、検索エンジンの機能を利用したウェブ上のブックフェアと販売である。インターネット書店と協力し、検索語で関連書籍が上位に表示され、読者が書籍を見つけ、購入しやすくなる方法を研究する。

第三は、学術書の電子化の可能性を研究し実験することである。

インターネット環境は日進月歩であり、新しい機能の開発は留まることがない。電子部会は学術情報の流通という定点を持っているが、さまざまに試行錯誤していくことになる。

爾来、大阪は文化、出版、藝術、藝能の表舞台となった。

織田作之助は『西鶴新論』を「西鶴は大阪の人である。大阪で生まれ、大阪で育ち、大阪で書き、大阪で死に、その墓も大阪にある」というフレーズで書き始めているが、近代文学の柱の一つとなったのは、井原西鶴らの浮世草子を中核とする町人文学であり、それは大阪の地で育ち、大きく花開いた。このことは、改めて文藝史を紐解くまでもない周知の事実である。

明治十九年に大阪西区で呱呱の声を上げ、今なお大阪に立地する大学の使命として、関西大学図書館は、大阪の文藝、絵画、演劇に関する資料の蒐集に努めてきた。これら一連の「大阪の文藝資料」は「近世絵画」「近世小説」「近世演劇」「近代絵画」「近代文藝」の分野からなり、平成十八年四月現在で二万点に達する資料が登録されている。

「近世絵画」の中には、大阪における文化サロンの主宰者ともなった木村兼葭堂の作品や月岡雪鼎、雪斎らの美人風俗画、戯画で有名な耳鳥斎などの絵が、また「近世小説」の分野では、井原西鶴を筆頭とする浮世草子や上方読本の特徴である絵本読本などがコレクションされている。「近代演劇」では、人形浄瑠璃や歌舞伎に関する資料が多数蒐集され、明治以降の「近代絵画」では、大阪を代表する日本画家、菅橋彦をはじめ、生田花朝や菅真人ほかの作品が所蔵されている。しかし、その中核をなすのは、何といても明治から昭和期に至る「近代文藝」資料の数かずであろう。このなかには書物だけでなく、北條秀司や今東光、難波利三、藤沢恒夫、織田作之助など、大阪と深い関わりをもった作家たちの直筆原稿も多数収められている。

現在、関西大学図書館は、所蔵資料のうち、普段公開されることのない貴重資料をホームページの「電子展示室」でデジタル画像により順次、学内外に紹介している。関西大学の誇る「大阪の文藝資料」も、近い将来、そうした新しい形態により手軽に閲覧できるようになるに違いない。

熊 博毅（関西大学出版部）

関西支部だより

編集後記

今号の特集のタイトルは、「大学出版国際化に向けて——座標軸をどこに定めるか」となった。ずいぶんと、大上段からの表明となったものである。

「国際化」に対応する英語は、「internationalization」だが、「globalization」に比して使われる頻度が少ないと仄聞したことがある——もっとも、外国語には至って不調法な「非国際人」の経験だから、あまり当てにはならないが。

このことの当否はともかく、一方、日本の巷では、「国際化」とか「国際人」なる語が、きわめて安直に飛び交っているのに違和感を覚えるのは私だけだろうか。

もちろん当然の如く、わが大学出版部協会も有力な「国際部会」を擁し、日・韓・中大学出版部協会合同セミナーを九度にわたって積み上げてきたし、また、同部会・電子部会合同で、英語学術情報の収集・発信事業を立ち上げようとしている矢先でもある。だからこそ、「国際化」に向けて、足元をしかと固め、肩の力を抜き、四圍を見定め、悠然と歩を進めようではないかという願いを込めてのタイトルだと言ったら、こじつけだろうか。

有限責任中間法人大学出版部協会 加盟出版部一覽

北海道大学出版会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3451-3124

産業能率大学出版部

103-0028 中央区八重洲 1-3-19 辰沼建物ビル7階
TEL 03-5205-2255 FAX 03-5205-2470

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野美術大学出版局

180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋千種区不老町 1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市薬音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172